

「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」 の意味・用法

工藤 嘉名子
(2004. 10. 29 受)

【キーワード】 「～にむけて」、「～にむかって」、「～をめざして」、移動の方向、行為の方向

1 はじめに

「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」は、いずれも移動や行為の〈方向〉を表す後置詞である。これらの後置詞は似通った文脈で用いられることが多いため、学習者にとっては、どれを使っても同じなのか、あるいは使い分けが必要なのかといったことが判断しにくい類似表現であると考えられる。

一方で、「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」は、「～にとって」や「～について」といった他の後置詞と比べて、動詞性が強いという特徴がある。そのためか、教材などでは動詞（語彙）として扱われることが多く、後置詞（文型）としての用法の記述は極めて少ない。

そこで、本研究では、「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」を後置詞として扱い、用例の比較分析によって、それぞれの後置詞の意味・用法を明らかにしていく。

2 先行文献における記述

2-1 動詞「向ける」「向かう」「目指す」の意味・用法

「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の後置詞としての意味・用法をみる前に、動詞「向ける」「向かう」「目指す」の意味・用法を確認しておく。『使い方よく分かる類語例解辞典』には、それぞれ次のような記述がある。

【向ける】…「対象に対して『向く』ような姿勢にさせる意。(p. 137)」

例) 背を向ける／カメラを友人に向ける

【向かう】…「他に対して自分の正面を向ける意だが、『新幹線で大阪に向かう』のように、主体がある地点をめざして移動する意もある。(p. 137)」

例) 机に向かう／聴衆に向かって話す

【目指す】…「目標が物であったり地点であったり、また、状態や資格などであったりと多様である。目標が抽象的な内容の場合は、上昇的なものであり、意志の感じられる語。(p. 300)」

例) 敵の大將を目指して進む／医師の道を目指す

これらの動詞には、「〈方向〉をもつ行為」を表すという共通点があることがわかる。この〈方向〉という意味の特徴が、後置詞「～にむけて」「～に向かって」「～をめざして」の意味・用法を体系的に理解する際の軸になると考えられる。

一方で、3つの動詞には次のような相違点がある。まず、「向ける」は他動詞的、「向かう」は自動詞的という違いはあるものの、これら2つの動詞には〈対面〉という意味があるのに対して、「目指す」には〈対面〉の意味はない。次に、「向かう」も「目指す」も、派生的な意味として、ある〈方向〉への主体の〈移動〉、より厳密には〈接近〉という意味をもっているが、「向ける」には〈移動〉の意味はない。さらに、「目指す」には本来「目標とする」という意味があり、目的語に相当するものを〈目標化する〉という特徴を持っている。

以上のことを整理すると、表1ようになる。

表1 「向ける」「向かう」「目指す」の意味的特徴

	共通点	〈対面〉	〈移動＝接近〉	〈目標化〉
向ける	〈方向〉	○ (他動詞的)	×	×
向かう		○ (自動詞的)	○	×
目指す		×	○	○

それでは、動詞「向ける」「向かう」「目指す」が後置詞「～にむけて」「～に向かって」「～をめざして」となるとき、どのような意味的变化が生じるのであろうか。小高(2000)は、動詞「向かう」から後置詞「向かって」への派生のプロセスを考察する中で、次のように指摘している。

「めざす」も「むける」も、「むかう」と同じく方向性のある具体的な動作をあらわす動詞である。このようなタイプの動詞がなかどめの形で用いられるさい、動作的な意味を喪失し、〈方向性〉と〈空間性〉という特徴がのこされ後置詞的になるという、ひとつのパターンがあるのではないだろうか。(p. 49)

この指摘にあるように、「具体的な動作性の喪失」という点が、動詞から後置詞へ

の意味的变化であると考えられる。ただし、「向ける」が「～にむけて」となる際には、動詞本来の「〈方向〉に〈物〉を向ける」という他動詞の用法が自動詞的な用法に変化するという特徴がある。

2-2 後置詞「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の意味・用法

「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の意味・用法を記述した先行文献は極めて少ないが、それぞれの後置詞の意味・用法を文献ごとに整理すると、表2のようになる。

表2 先行文献における「Nにむけて」「Nにむかって」「Nをめざして」の記述

文献	Nにむけて	Nにむかって	Nをめざして
A.	1. 方向 N=場所、方位 例. 入口に背を向けて座っている。 ⁽¹⁾ 2. 目的地 N=場所 例. 彼らは任地に向けて出発した。 3. 相手/対象 ⁽²⁾ N=人、組織 例. 人々に向けて戦争の終結を訴えた。 4. 目標 N=できごと 例. スポーツ大会に向けて厳しい練習が続けられた。	1. 方向 (移動/変化) 例 1. この飛行機は現在ボストンに向かっています。 ⁽³⁾ 例 2. 春に向かって暖かくなってきた。 2. 対面 N=もの、人 例 1. 机に向かって本を読む。 ⁽⁴⁾ 例 2. マリア像に向かって祈りを捧げる。 例 3. 私の部屋は正面に向かって左側にあります。 3. 相手 N=人 例. 親に向かって乱暴な口をきく。	
B.	既定の目標 例. 10月のアジア大会の開催にむけ、官民一体となって準備中である。		到達目標 例. 1級合格をめざしてこの本で勉強することにした。
C.		1. 移動の〈方向〉 例. 男は(略)岸にむかって、引き返して行った。 2. 言語活動の〈方向〉 例. お婆ちゃんは茂造にむかって旺んに喋っている様子だった。 3. たちいふるまいの〈方向〉 例. ダスティン船長は、カメラに向かって手をふって、いった。 4. 空間的な配置の〈方向〉 例. ポプラ並木が土手の下手川下に向かって延々とつづいていた。	

A. グループ・ジャマシイ (1998, p. 453, p. 567) ; B. 三好他 (1996, p. 12) ;

C. 小高 (2000)

これらの文献は、記述の目的や用法の分類の仕方、用例の文体などにおいてそれぞれ異なるため、ここからは「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の意味・用法の全体像が見えてこない。そこで、本研究では、これら3つの後置詞について用例収集を行い、意味・用法の分類および比較を行う。

3. 用例分析

3-1 用例収集

語彙や文型といった言語的要素の用いられ方は、ジャンルや文体などと密接に関わっている。教育場面への応用を考えると、用例分析は日本語学習者の言語生活に密着した様々なジャンル（新聞、専門書、学術論文、手紙、ニュース、スピーチなど）を対象とするのが望ましい。しかし、そうした分析は膨大な時間を要し、なかなか実現できないのが現状である。そこで、本研究では、データベース化されている新聞と文学という異なる2つのジャンルを取り上げ、「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の用例を分析した。用例分析の対象として、文学を取り上げることには疑問の声も多いが、具体的に何が「文学的」で特殊な用法なのかという点も含めて、これらの後置詞の意味・用法を明らかにしていくことにする。また、一口に「文学」「新聞」と言っても、文体は実に多様であるが、ここでは、「新聞＝情報性の高いジャンル」「文学＝物語性の高いジャンル」という大雑把な括りで扱う。

用例は、それぞれの後置詞について「朝日新聞 DNA⁽⁵⁾（2003 上旬～2004 年上旬）」と『新潮文庫 100 冊 CD-ROM』から検索、収集した。用例数は表3の通りである。なお、『新潮文庫』の用例数は検索結果の全数であるが、「朝日新聞」の場合は、ランダムに表示された全検索結果（各 5,000 件以上）の上から順に 100 件前後を取り出したものである。ただし、その中には「～に～を向けて」「～に向かっている」「～を目指している」といった本動詞の用法が含まれていたため、最終的な用例数にはばらつきがある。

表3 「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の用例数

～にむけて		～にむかって		～をめざして	
朝日新聞	新潮文庫	朝日新聞	新潮文庫	朝日新聞	新潮文庫
102	91	77	352	79	29

新潮文庫の用例数を見ると、「～にむかって」は352例と、他の二つに比べて数が多いことがわかる。一方、『新潮文庫100冊』という膨大な言語資料からの検索結果であるということを考えれば、文学のジャンルにおける「～をめざして」の用例は極端に少ないと言えるであろう。

3-2 意味・用法による用例の分類

先行文献、特に小高(2000)における意味・用法の分類にならい、本研究では「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の意味・用法を、〈方向〉という一つの基軸に沿って、〈移動の方向〉〈変化の方向〉〈行為の方向〉〈空間的配置の方向〉という4つに分類した。〈移動の方向〉は「人や物がある特定の方向に移動する様子」を表し、〈変化の方向〉は「状態や状況がある特定の方向に変化する様子」を表す。〈行為の方向〉は「ある特定の方向に主体の行為が向けられる様子」を指すが、行為が向けられる先の属性により、さらに〈人／もの／場所〉〈目標〉という2つの下位項目に分類した。〈空間的配置の方向〉は「物や地形などがある特定の方向に空間的に配置される様子」を表す。それぞれの用例数は表4に示す通りである。なお、比較がしやすいよう、「～にむかって」のみ用例数の割合(%)も示した。

表4 「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の意味・用法の分類(用例数)

		～にむけて		～にむかって		～をめざして	
		新聞	文庫	新聞(%)	文庫(%)	新聞	文庫
移動の方向		8	48	16 (20.8%)	127 (36.1%)	7	23
変化の方向		0	0	1 (1.2%)	2 (0.6%)	*0	*0
行為の方向	人／もの／場所	15	33	33 (42.9%)	207 (58.8%)	*0	*0
	目標	79	5	15 (19.5%)	1 (0.3%)	72	6
空間的配置の方向		0	5	12 (15.6%)	15 (4.3%)	*0	*0
計		102	91	77	352	79	29

*本来あり得ない用法

まず、「～にむけて」と「～をめざして」には、用例の分布パターンに同じような

傾向がみられる。どちらも、新聞では〈行為の方向－目標〉が圧倒的に多いのに対し、文学では著しく少ない。逆に、文学で高い割合を占める〈移動の方向〉は、新聞ではごく少数の用例にとどまっている。用例数はテーマやトピックに左右されることが多いため、この結果を2つのジャンルの違いとして結論づけることはできないが、新聞記事に出現する「～にむけて」「～をめざして」の用法は圧倒的に〈行為の方向－目標〉が多いという点は、教育的見地から見て興味深い。

次に、「～にむかって」は、文学では〈移動の方向〉〈行為の方向－人／もの／場所〉に9割の用例が集中しているのに対し、新聞では〈変化の方向〉以外の用法に用例が分散している。このことから、「～にむかって」については、意味・用法の多様性を提示していくことが重要ではないかと考えられる。また、文学では1例(0.3%)しかなかった〈行為の方向－目標〉は、新聞では19.5%と2割近い割合を占めている。先行文献では「～にむかって」の意味・用法として〈目標〉という分類項目はなかったが、この用法については、「～にむけて」「～をめざして」とあわせて分析していくことにする。

なお、「～をめざして」は、動詞「目指す」自体に〈移動の方向〉〈行為の方向－目標〉以外の意味・用法がないため、後置詞「～をめざして」についてもこの2つの分類項目以外は該当しないであろうと予想されたが、用例分類の結果、やはり他の用法は用例が皆無であった。

3-3 意味・用法の比較

3-3-1 移動の方向：「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」

〈移動の方向〉を表す用法は、いずれの後置詞も方位や場所を示す名詞とともに〈方向〉を差し出し、後置詞の後ろには「歩く、出発する」といった移動動詞をとる。しかし、これらの後置詞は、〈移動〉が単に特定の〈方向〉への移動なのか、それとも〈目的地〉への移動なのかという点において異なる。

まずはじめに、元の動詞に〈移動〉の意味がある「～にむかって」と「～をめざして」についてみていく。用例(1)(2)と(3)～(5)を比較すると、「～をめざして」の方は、後置詞に先行する名詞の属性に関わらず、〈目的地〉への移動という意味合いが強い。これは、元の動詞「目指す」の意味的特徴、即ち〈目標化〉によるものと考えられる。一方、〈目標化〉という特徴をもたない「～にむかって」の用例をみると、やはり〈目的地〉への移動というよりは、ある特定の〈方向〉への移動とみるのがよさそうである。これは、『～にむかって』があらわすのは移動の〈方向〉で

あって、〈目的地〉ではない (p. 42)」という小高 (2000) の指摘の通りである。

- (1) 気球は (略)、一斉に手を離すと天を目指して勢いよく揚がった。(朝日新聞)
- (2) 信秀は、(略) 尾張平野をめざして馬を駆けさせた。(『国盗り物語 (齋藤道三)』)
- (3) 同日午前7時ごろ、同町の錫杖湖付近の県道を東に向かって歩くYさんらしい姿が目撃されている。(朝日新聞)
- (4) 私は (略) 本隊がもう明日、日本にむかって出発するということをききました。
(『ビルマの豎琴』)
- (5) 国道をそれて岬の中腹をぬっている道を海岸にむかっておりて行くと、やがて松林ごしに少年院の建物が見おろせる。(『冬の旅』)

次に、「～にむけて」の用例 (6)～(8)をみると、「金沢」「昭和基地」「空」という地名や場所は、移動の〈目的地〉としての意味合いが強いことがわかる。ただし、「～をめざして」の場合、〈目的地〉は一種の〈到達目標〉として設定されているのに対し、「～にむけて」の〈目的地〉は、移動する主体の到着を前提とした〈受け入れ先〉、つまり〈既定の到着点〉として、主体が移動する移動軸上に設定されていると考えられる。また、「～をめざして」は主体の〈目的地〉への〈接近〉の意味合いが強いのにに対して、「～にむけて」自体には〈接近〉の意味合いはなく、述部の移動動詞によってはじめて〈接近〉の意味を獲得するという特徴がある。

さて、ここで用例(9)(10)をみると、「北」「駅の方」という方位や方角は、移動の〈目的地〉というよりは、移動の〈方向〉にすぎない。しかし、このような「～にむけて」の用例は文学でのみ出現した用法で、新聞における「～にむけて」の用例は全て〈目的地〉への移動を表す用法であった (表4参照)。このことから、用例(9)(10)のようなある特定の〈方向〉への移動を表す「～にむけて」の用法は、文学的な文体に依存した特殊な用法である可能性が高く、教育の場面では「～にむかって」で提示すればよいと思われる。

- (6) 黒谷久男の両親が任地の金沢に向けて出発したということ、ある日太郎は久男から聞いた。(『太郎物語・高校編』)
- (7) 南極観測船「しらせ」は (略) 昭和基地に向けて航海中。(朝日新聞)
- (8) 赤道直下、ガラパゴス諸島沖合の海上基地から、人間を乗せた宇宙リニアモーターカーが初めて空に向けて出発した。(朝日新聞)

- (9) 「戸坂、戸坂」と三人は口々に云って、北に向けて歩いて行った。(『黒い雨』)
(10) 僕等は有楽町の駅の方に向けて歩いた。(『草の花』)

最後に、〈移動の方向〉の用法として、「～にむかって」には用例(11)のような、何かに〈対抗〉する方向への移動を表す用法も2例あった。これは、「はむかう、抵抗する」という動詞「向かう」のもつ別の意味から生じた用法であろう。

- (11) 背中を丸めて荒れ狂う吹雪に向かって歩くとき、たしかに生きているという実感がいたします。(『塩狩峠』)

3-3-2 変化の方向：「～にむかって」

〈変化の方向〉の用法は、〈移動の方向〉から派生した「～にむかって」特有の用法ではないかと推測されるが、用例が3例しかなかったため、ここでは大まかな特徴を記述するにとどめたい。用例(12)～(14)をみると、「～にむかって」は、「赤字路線廃止、人員整理…分割・民営化」「将来」「寒さ」といった〈将来の状況〉を示す名詞とともに変化の〈方向〉が差し出され、後置詞の後ろに変化動詞を伴う。また、ここでの「～にむかって」には、「～に向かうにつれて」と同じような意味合いがあり、〈将来の状況〉へ向かっていく〈変化〉と、それに随行する〈変化〉という二重の〈変化〉が生じているとみられる。これは、動詞「向かう」のもつ、「ある〈方向〉への主体の〈接近〉」という意味的特徴が強く働いているためであろう。

- (12) 赤字路線廃止、人員整理…分割・民営化に向かって状況が緊迫する82年、旧鹿兒島鉄道管理局で人事課に所属した。(朝日新聞)
(13) 将来に向かって医療水準が高まるにつれ、需要も多くなるにきまっている。
(『人民は弱し官吏は強し』)
(14) このさき寒さにむかい、叡山の朝倉軍は自然に飢えてゆくにちがいない。
(『国盗り物語 (織田信長)』)

3-3-3 行為の方向—人/もの/場所：「～にむけて」「～にむかって」

この用法では、〈人〉〈もの〉〈場所〉を表す名詞とともに、行為の向けられる〈方向〉が示され、後ろには、「言う、話す」などの「言語活動」や、「(物を)投げる、手を振る」といった「たちいふるまい⁽⁶⁾」を表す動詞が続く。

「～にむけて」と「～にむかって」の用例を比較すると、「～にむけて」では、行為が向けられる先にある〈人〉〈もの〉〈場所〉は、主体の行為の〈受け入れ先〉、即ち〈対象〉として想定されていることがわかる。そのため、用例(16)(17)のように、実際には「耳」「客席」といった〈もの〉や〈場所〉に向けられた行為であっても、そこには行為の〈受け入れ先〉としての〈人〉の存在が感じられる用法が多い。それに対し、「～にむかって」の場合は、用例(18)～(20)にみるように、〈人〉〈もの〉〈場所〉は主体の行為の〈対象〉ではなく、行為が向けられる〈方向〉でしかない。このことは、用例(19)において顕著である。行為が向けられる〈方向〉としての「マイク」には、「話す」という主体の行為を受け入れる能力はない。したがって、この場合、「～にむけて」には置き換えられない。

さらに、用例(15)のように、「～にむけて」は、〈対象〉が目の前にいる必要がなく、行為そのものが〈対象〉に向けられてさえいればよいが、「～にむかって」の場合は、行為が向けられる〈人〉〈もの〉〈場所〉は主体の目の前に存在し、〈対面〉の関係になければならない。したがって、用例(15)の「記事を書く」という行為は、〈対象〉である「読者」と〈対面〉することはできないため、「～にむかって」には置き換えられない。ちなみに、小高(2000)は、「(記事/手紙)を書く」と同種の動詞として、「電話する」「連絡する」を挙げている。

- (15) 私の場合、読者に向けて記事を書いていながら、実際どう受け止められたのか、知る機会はあまりなかった。(朝日新聞)
- (16) 「足を止めないで！」と彼女が私の耳に向けてどなった。(『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- (17) 約1時間の熱演後、Oさんは、客席に向けて、深々と頭を下げた。(朝日新聞)
- (18) 水島はわれわれにむかってふかく頭をさげ、(略)人ごみのあいだをむこうに去りました。(『ビルマの豎琴』)
- (19) マイクに向かって話すだけで電子カルテに入力できる音声認識システムを、ベンチャー企業Aが開発した。(朝日新聞)
- (20) 優勝して観客席に向かって手をふるPの選手たち=東京体育館で(朝日新聞)

なお、〈行為の方向—人/もの/場所〉を表す「～にむけて」「～にむかって」の用法は、「～に対して」との比較も必要であると思われるが、本稿では分析の対象としなかった。

3-3-4 行為の方向－目標：「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」

ここでは、具体的にどのような〈目標〉に対してどのような行為がとられるのかということに焦点を当てて、それぞれの後置詞の用法を明らかにしていく。

まず、先行文献で既に比較されている「～にむけて」と「～をめざして」についてみていく。三好他(1996)は、「～にむけて」は「既に決まっている目標のために何かをする(p.12)」、「～をめざして」は「具体的な到達目標のために何かをする(p.12)」とし、それぞれに〈既定の目標〉〈到達目標〉という用語を与えている。用例(21)～(26)をみると、たしかにこの区別で全て説明がつく。ただし、「～にむけて」には、用例(27)のような例も多く、〈既定の目標〉というのが単に日程の決まった〈出来事〉や〈期日〉だけを指すのではないという説明が必要であろう。用例(27)の「国家再建」は一見〈到達目標〉のようであるが、「国家再建にむけて」という時、実は、「国家再建」という〈到達点〉を時間軸の先に〈目標〉として掲げているにすぎず、「国家再建をめざして」に内包されるような主体自身の〈目標への接近〉という意味合いはない。また、「～をめざして」と異なり、「～にむけて」は〈目標〉に到達できるかどうかということには焦点がない。このように、「～にむけて」は、時間軸上にあたかも〈既定の出来事〉であるかのように〈到達点〉を掲げるという意味において、〈既定の目標〉と考えることができるのである。これは、〈移動の方向〉における「～にむけて」「～をめざして」の用法に通ずる。

- (21) 定期演奏会に向けて、親子の連弾を練習したこともあった。
- (22) WTOの閣僚会議は、14日の最終日に向けてぎりぎりの交渉が続く。
- (23) 飛騨物産館は、18日のオープンを目指して改修工事中。
- (24) 集まった募金は、(略)直島などの林野火災などで焼失した緑の再生を目指して04年度から始まる「森林再生事業」に充てられる。
- (25) 翌年、大リーグの審判を目指して単身渡米した。
- (26) 三女は(略)大学を目指して受験勉強中だという。(以上、朝日新聞)

.....

(27) カンボジアはパリ和平以降、国家再建に向けて大きく動き出した。(朝日新聞)

「～にむけて」と「～をめざして」の意味の違いが明らかになったところで、それぞれの用法を整理しておく。「～をめざして」は、〈到達目標〉として、用例(23)～(26)のような〈出来事〉〈到達点〉〈資格〉〈進学先〉などを表す名詞の他に、「来

年3月)のような〈期日〉や、「しっかり守れるチーム」や「売れる新聞」といった〈スローガン〉がくる場合もあり、後置詞に先行する名詞の用法に制約が少ない。これに対して、「～にむけて」は、用例(21)(22)(27)のように、〈既定の目標〉として、〈出来事〉〈期日〉〈到達点〉を表す名詞がくるが、いずれも時間軸上に設定できるものでなければならない。しかも、「～にむけて」の場合、〈到達点〉は「国家再建」「問題解決」のように動作名詞に限られる。したがって、用例(26)(27)のような時間軸上に設定できない〈資格〉や〈進学先〉は「～にむけて」に置き換えることができず、「～にむけて」で表そうとするならば、「大学進学にむけて」のように動作名詞化して〈到達点〉に変換するという手続きが必要である。なお、「～にむけて」「～をめざして」は、いずれも述部に具体的な行為を表す動詞を伴う。

さて、次に、「～にむかって」の用例(28)(29)をみると、「～にむけて」「～をめざして」と異なり、「～にむかって」には〈目標〉を示す名詞にも、行為を表す述部にも具体性が欠如していることがわかる。「～にむかって」の場合、「目標」「夢」「将来の自分」「明日」といった語句によって〈目標〉という意味合いを得ているのが特徴である。また、述部も「頑張る」「努力する」「しっかりやる」のように、具体的な動作ではなく意気込みを表す動詞が続くことが多い。こうした用例の大半は新聞のインタビューやスピーチなどの談話部に出現していることから、決まり文句として話し言葉でよく用いられる用法ではないかと推測される。ただし、この用法は「～にむかって」の他の意味・用法に振り分けることができない独立した用法であり、「～にむかって」の新たな用法として付け加えることができるのではないかと思う。

(28)「(略) 人生の目標にむかってやるべきことをやってください」とはなむけの言葉を贈った。(朝日新聞)

(29)「自己表現や次の夢に向かって頑張る人を応援する場にしたい」と話す。(朝日新聞)

最後に、「～にむけて」特有の用法として、用例(30)～(32)のように、〈目標〉が〈出来事〉〈期日〉の場合に、後ろに具体的な行為ではなく、状態や状況を表す述部が続くことがある。「～をめざして」「～にむかって」では、〈目標〉と述部の間に「述部の〈行為〉をもって主体が〈目標〉に接近する」という意味的關係が成り立たなければならないが、「～にむけて」の場合は、時間軸上に〈目標〉を掲げているだけで、述部を規定しない。したがって、掲げられた〈目標〉に対して主体がどのよう

な行為をとるかだけでなく、主体の状態や、主体が置かれた状況がどうであるかといったことも、述部にくることができると考えられる。

(30) 「そのときは、五輪に向けてプレッシャーを感じているようだった。」

(31) 桃の節句が終わったばかりだが、県内の人形店では5月5日の端午の節句に向けて五月人形の販売がピークを迎える。

(32) 7日に当地で閉幕した陸上の世界室内選手権はロシア旋風に湧いた。(略) アテネ五輪に向けて最高の追い風となった。(以上、朝日新聞)

3-3-5 空間的配置の方向：「～にむけて」「～にむかって」

〈空間的配置〉の用法では、「～にむけて」も「～にむかって」も、まず、方位や位置、目印を表す名詞とともに〈空間的配置〉の〈方向〉を差し出し、空間認知の視点を与える。そして、述部として「曲がる、突き出す、延びる、広がる、連なる、並ぶ」といった、地形の形状や物の配置を表す動詞を伴う。この用法に関しては、用例(33)～(36)のように、「～にむけて」と「～にむかって」の意味の違いはなく、いずれも後置詞の入れ替えが可能である。ただし、〈空間的配置の方向〉を表す「～にむけて」の用例は文学のジャンルのみで、新聞では皆無であった(表4参照)。このことから、ここでの「～にむけて」と「～にむかって」の違いは、文体差として扱うことができるのではないかと推測される。したがって、教育の場面では、〈空間的配置の方向〉として「～にむけて」をあえて提示する必要はないと考えられる。

一方、用例(37)の「～にむかって左側」のように、後置詞の後に左右の位置関係を表す名詞が続く用法は、「～にむかって」特有の用法で、「～にむけて」には置き換えられない。これは、「他に対して自分の正面を向ける」という動詞「向かう」がもつ〈対面〉の意味から生じた用法であると言えよう。

(33) ウクライナからモスクワに向けて、電信線をつなぐ電柱がずっと連なっていて、(略)。(『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

(34) 博士の説によればもう少し前に進むと絵画館の並木道の方に向けて左に曲る道があるはずだった。(『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

(35) 今年度の調査の結果、遺跡の北西から南東に向かって延びている環状配石墓の列の長さは310メートルに、道路跡も370メートルに延びた。(朝日新聞)

(36) そして客席は、さらに二階、三階、四階と、屋根に向かってすりばち状に広

がっている。(『一瞬の夏』)

(37) 頂上に向かって左側の稜線がマロリーらが遭難した北東稜。(朝日新聞)

4 まとめ

以上の分析結果から、後置詞「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の意味・用法をまとめると、表5のようになる。

表5 「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の意味・用法のまとめ

		～にむけて	～にむかって	～をめざして
移動の方向		〈目的地〉 *既定の到着点 N=地名、場所 Pr=移動動詞	〈方向〉 N=地名、場所、方位 Pr=移動動詞	〈目的地〉 *到達目標 N=地名、場所、方位 Pr=移動動詞
	変化の方向		〈方向〉 N=将来の状況 Pr=変化動詞	
行為の方向	人もの場所	〈対象〉 *行為の受け入れ先 N=人、組織、もの、場所 Pr=言語活動、振る舞いを表す動詞	〈方向〉 *〈対面〉が前提	
	目標	〈既定の目標〉 N=出来事、期日、到達点 Pr=具体的行為、状態を表す動詞	〈目標〉*具体性なし N=「目標、夢、将来、明日」など特定の名詞 Pr=「頑張る、努力する」など意気込みを表す動詞	〈到達目標〉 N=出来事、期日、到達点、資格、進学先 Pr=具体的行為を表す動詞
空間的配置の方向			1) 〈方向〉 N=地名、場所、方位 Pr=形状や配置の動詞 2) 〈対面〉 *「N1にむかってN2」 N1=場所、位置、物 N2=「左」「右」	

N=後置詞に先行する名詞；Pr=述部

最後に、それぞれの後置詞について、意味・用法の基底をなす意味的特徴を整理すると、表6のようになる。一見すると、後置詞「～にむけて」は、動詞「向ける」の「ある〈方向〉に〈物〉を対面させる」という意味をすっかり喪失してしまったかのように見える。しかし、「～にむけて」を「〈目標〉に(目を)むけて」「行為の

〈受け入れ先〉に〈行為を〉むけて」と解釈すると、動詞「向ける」のもつ他動詞的な〈対面〉の意味が消えずに残っていることがわかる。一方、「～にむかって」「～をめざして」は、元の動詞「向かう」「目指す」の意味的特徴が色濃く残っている。したがって、動詞「向かう」「目指す」自体の意味・用法を十分に理解することが後置詞の意味・用法を理解する上で、不可欠であると考えられる。

表6 「～にむけて」「～にむかって」「～をめざして」の意味的特徴

～にむけて	<ul style="list-style-type: none"> ・移動軸、時間軸上に〈目標〉となる「点」を掲げるが、主体の〈接近〉は伴わない。その〈目標〉は〈既定性〉が高い。 <ul style="list-style-type: none"> → 〈移動の方向〉 〈行為の方向－目標〉 ・〈人／もの／場所〉に行為が向けられる場合、〈人／もの／場所〉は行為の〈受け入れ先〉として想定される。 <ul style="list-style-type: none"> → 〈行為の方向－人／もの／場所〉
～にむかって	<ul style="list-style-type: none"> ・「点」ではなく時間的、空間的に幅や広がりのある〈方向〉への主体の〈接近〉を表す。 <ul style="list-style-type: none"> → 〈移動の方向〉 〈変化の方向〉 〈行為の方向－目標〉 〈空間的配置の方向1〉 ・〈接近〉の意味がない場合は、〈対面〉の意味になる。 <ul style="list-style-type: none"> → 〈行為の方向－人／もの／場所〉 〈空間的配置の方向2〉
～をめざして	<ul style="list-style-type: none"> ・移動軸、時間軸上に「点」で示された〈到達目標〉への主体の〈接近〉を表す。 <ul style="list-style-type: none"> → 〈移動の方向〉 〈行為の方向－目標〉

5 今後の課題

本稿では、教育場面において、それぞれの後置詞を具体的にどのように提示していけばよいかということろまでは考察できなかった。具体的な教育場面への応用については、今後、学習者の文章産出や発話といったプロダクションの側面ともあわせて考えていきたい。さらに、新聞、文学以外のジャンルや話し言葉についても用例をみていきたい。

注

- (1) (3) いずれも動作の付帯状況を表す本動詞の用法である。本稿では、こうした動作の付帯状況を表す本動詞の用法と後置詞の用法とを区別して扱う。
- (2) 「～にむけて」は文献 A では、「にむけて」と「むけて」の 2 カ所に記述があり、用語も〈相手〉〈対象〉と 2 種類あったため、ここでは併記した。
- (4) 「机に向かって本を読む。」「黒板に向かって座る。」といった例文は、動作の付帯状況を表す本動詞「向かう」の用法である。これに対して、「マリア像に向かって祈りを捧げる」は、「祈りを捧げる」という行為が「マリア像」に向けられるという関係が成り立つため、後置詞の用法であると考えられる。本稿では、後者のような後置詞の用例のみを分析の対象とする。
- (5) 「朝日新聞全文記事検索サービス (Digital News Archives for Library)」の略で、大学などの図書館など学内利用に限り無料で提供されている。朝日新聞全国紙、地方紙の朝・夕刊の他、雑誌『AERA』『週刊朝日』の記事も含まれる。
- (6) 「言語活動」「たちいふるまい」という用語は小高 (2000) に従う。

資料 (『新潮文庫 100 冊 CD-ROM』収録分)

井伏鱒二『黒い雨』／沢木耕太郎『一瞬の夏』／司馬遼太郎『国盗り物語』／曾野綾子『太郎物語・高校編』／竹山道雄『ビルマの豎琴』／立原正秋『冬の旅』／福永武彦『草の花』／星新一『人民は弱し官吏は強し』／三浦綾子『塩狩峠』／村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(以上、新潮文庫)

参考文献

- 小高愛 (2000) 「『むかう』と『むかって』－動詞から後置詞へ－」『千葉大学留学生センター紀要』6号, pp. 33-51
- グループ・ジャマシイ編著 (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 小学館 (1994) 『使い方の分かる類語例解辞典』小学館
- 新潮社 (1995) 『新潮文庫 100 冊 CD-ROM』新潮文庫
- 三好礼子・吉木徹・米澤文彦 (1996) 『すぐに使える実践日本語シリーズ 10 日本語マスターの鍵を握る助詞 (上級)』専門教育出版

The Usage of “-ni mukete,” “-ni mukatte,” and “-o mezashite”

KUDO, Kanako

Postpositions “-ni mukete,” “-ni mukatte,” and “-wo mezashite” all express <direction> of motion and action, and frequently appear in a similar linguistic environment. However, the distinctions in usage among these postpositions are not clearly stated in literature. This study was conducted for the purpose of clarifying their differences in meaning and usage.

The data (i.e. sample sentences) were collected from digital newspaper articles and a CD-ROM collection of Japanese literature books. The meaning and usage of the three postpositions in the sample sentences were compared in the following four semantic dimensions: (1) <direction> of motion; (2) <direction> of change; (3) <direction> of action; and (4) <direction> of space layout.

The essential meanings of each postposition across the dimensions were identified as follows:

1. “-ni mukete” presents an agent a “destination” of motion or a “predetermined goal” of action, but it does not necessarily involve the agent’s actual “approach” to it. “-ni mukete” also indicates the “target” of an action, when the action is directed towards a person, an object or a place.
2. “-ni mukatte” expresses: 1) an agent’s “approach” towards a specific “direction” of motion or action; 2) an agent’s “confrontation” with a person, an object or a place, when an action is directed towards it.
3. “-wo mezashite” always indicates an agent’s attempts to reach or achieve a specific “goal”.